



未知との遭遇

永井 宏
神鋼記念病院皮膚科部長

皮膚科医になって今年でちょうど30年目になるが、いまだに日々の診療で「この皮疹(疾患)はなんだ?」と思うことがしばしばある。30年も経験を積み、そう思うことが年々減っているかというとは決してそういう印象はない。そうした症例に対しては詳しい病歴聴取や各種精査を行い、皮膚科学の成書や既報告文献を参考にしつつ確定診断を試みることになる。この謎解きにも似た診断プロセスは小生にとって皮膚科学の大きな醍醐味の1つとなっている。しかし、特徴的な有意所見がなく、確定診断できない症例は少なくない。一方、有意所見があるにもかかわらず、いくら調べても同様症例を既報告に見出せない場合もまれながら経験する。この場合に考えられる可能性は2つ、つまり「なお調べ方が不十分」か「既報告にない未知の疾患に遭遇した」かのどちらかになる。

先日、丘疹紅皮症(太藤)について発表する機会があり、最新の総説を含む文献とともに太藤重雄先生が「Papuloerythroderma」として4症例を最初に発表された論文(Dermatologica 169:125, 1984)を拝読した。太藤先生は、その5年前の1979年に「最近、文献に記載の見当たらない症例に遭遇したので報告する」という書き出しで邦文雑誌に2症例を発表されているが、新規の疾患として広く提唱するために英文誌へ投稿されたのだらうと推察する。

多くの皮膚疾患で、最初にその疾患(概念)を提唱

した論文が存在するが、その著者は恐らく皆、「この皮疹(疾患)はなんだ?」と最初に思ったことだろう。そして、詳細な検討の末、「未知の疾患」の可能性を確信し、論文として残している。小生もこれまで多くの「この皮疹(疾患)はなんだ?」を経験する中で、1報だけ新規疾患概念の可能性を提唱する機会に恵まれた。その臨床および病理組織学的特徴がどうしても既知の疾患にあてはまらないと考え、「neutrophilic superficial eccrine ductitis」として2018年に発表した。昨年、同疾患として『JAAD Case Reports』に報告があったが、その著者も「この皮疹(疾患)はなんだ?」と思ったことだろう。

日常診療の中で、未知の疾患と遭遇する可能性は極めて低いと思われるが、決してゼロではないわけで、「この皮疹(疾患)はなんだ?」と思った際は、その可能性もありうることに留意しつつ調べてみてはどうだろうか。特徴的な有意所見があるにもかかわらず、徹底的に調べて既報告になれば、未知の疾患に遭遇したのかもしれない。小生が思いがけずそうであったように。